

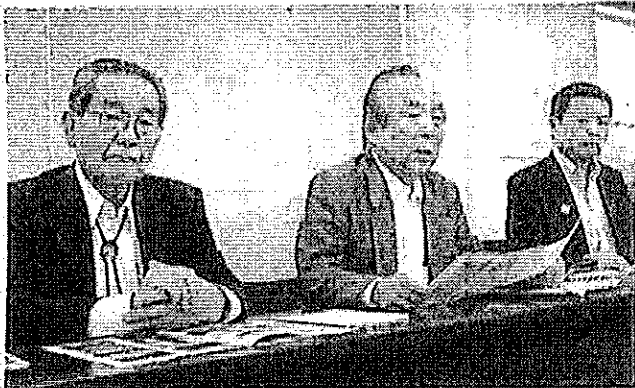
元台湾少年工 続く交流

今秋75周年記念式典 座間に顕彰碑

大戦末期、台湾から少年8400人が日本本土へ渡り、高座海軍工廠（現在の座間、大和市）で戦闘機の製造に従事した。終戦で台湾に戻り、70年余を経て交流は続いてきた。高座を「第二の故郷」といつくしむ元少年工が今秋、来日し、地域の人々や県に感謝を伝える。日本側は、功績と交流を次世代に伝える記念事業を計画する。

「最後の事業になる。日本に貢献し、二つの国の最も困難な時代を生き抜いた少年工の姿と、戦時から人々が重ねた優しさの歴史を日本人は知ってほしい」

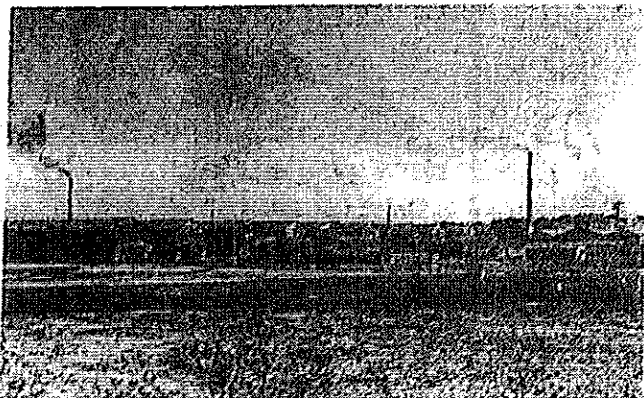
県庁で8日に会見した高座日台交流の会の石川公弘



元少年工を顕彰する75周年記念事業を発表する石川公弘実行委員長（中央）ら＝県庁

会長（84）はこう話した。元少年工は大半が90代で、亡くなった人も多い。石川さんは戦中、父が少年工の寄宿舎の舎監だった縁で共に暮らした。大和市議時代、50周年の歓迎大会を開くと、台湾から元少年工

1400人が来日。今回計画する75周年式典に來られるのは30、40人という。1943年、厚木基地に配備する戦闘機「雷電」製造のため高座海軍工廠ができた。海軍は植民地・台湾の少年に労働力を求め、「本土で学び実習すれば旧制中学と同等の卒業資格を授かる」との条件を提示。優秀な若者が競って志願し、選抜された。



大和町（当時）上草柳にあった台湾少年工の寄宿舎。40棟が立ち並んだ＝石川公弘さん提供

実際は働きつめの2年間だった。寒さとひもじさ、銃爆撃の恐怖の連続。犠牲者も出た。温かく見守ったのが、100軒に満たない高座の農村だった。芋やおにぎりをふるまひ、破れた衣類をつぎはぎし、家族のようにかわいがった。

少年工の同窓組織「台湾高座会」の李雪峰会長（91）は「工廠では常に日本人と平等でした。愛情をいただいた高座への愛は不変です。若い世代に台日交流をつなきたい」と語る。

少年工は台湾で88年間の戒厳令下を生き、発展の中心を担った。親日家が多く、日台最大級の交流組織となり、東日本大震災へも世界有数の支援を展開した。

李会長らは10月に来日する。今回は、地域社会とともに興知事に謝辞を伝えたいという。終戦で海軍省がなくなり、8400人の帰還を最後まで世話したのが県の事務官だったからだ。日本側は、交流団体や政財界が75周年歓迎大会（会長・甘利明衆院議員）の実行委員会を立ち上げた。顕彰碑を座間市の芹沢公園に建立し、工廠跡地の見学施設化も構想。10月20日に元少年工を招き、式典と顕彰碑除幕式を実施する。記念誌も制作する計画で、戦中からの地域の記録写真の提供を呼びかけている。

（青村成夫）

横浜

先行逃げ切りの展開に 平田監督

藤原 在 藤原 在 藤原 在

会代 命 で ヨ 太